

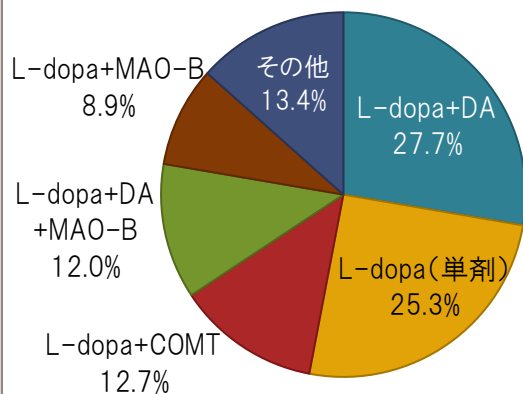
分析編 サンプル

4. 処方内容 / 薬剤別処方患者割合

- L-dopa製剤+ドパミンアゴニストを処方されている患者が最も多く、L-dopa単剤が続いていずれも2割以上。
- L-dopa製剤はほとんどの患者に、ドパミンアゴニストは5割弱の患者に処方されている。
- さらに、MAO-B阻害薬が27.3%、COMT阻害薬が15.2%と続く。

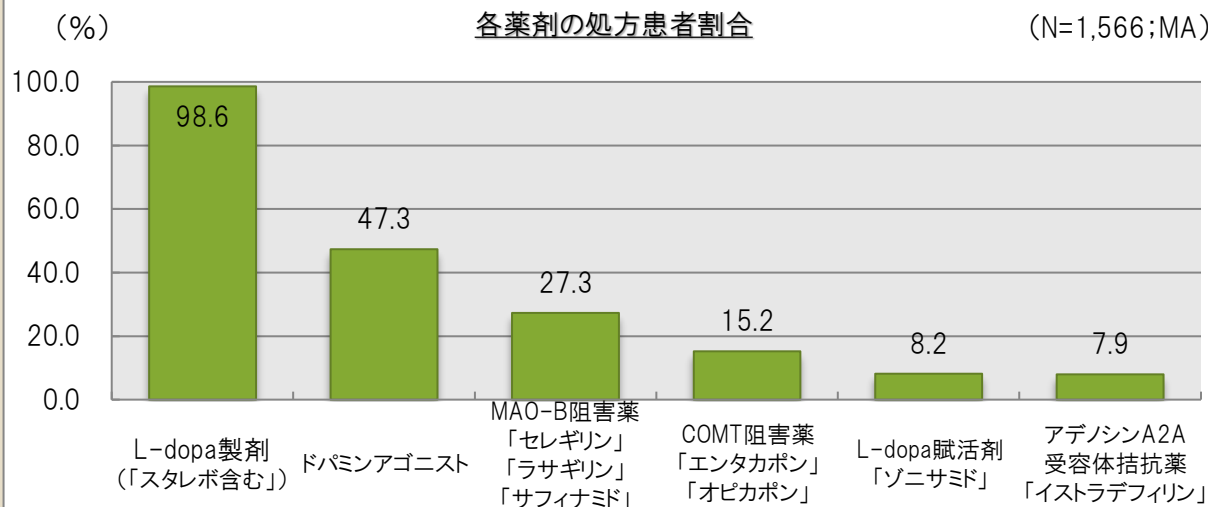
処方内容別患者割合

(N=1,566)



各薬剤の処方患者割合

(N=1,566; MA)



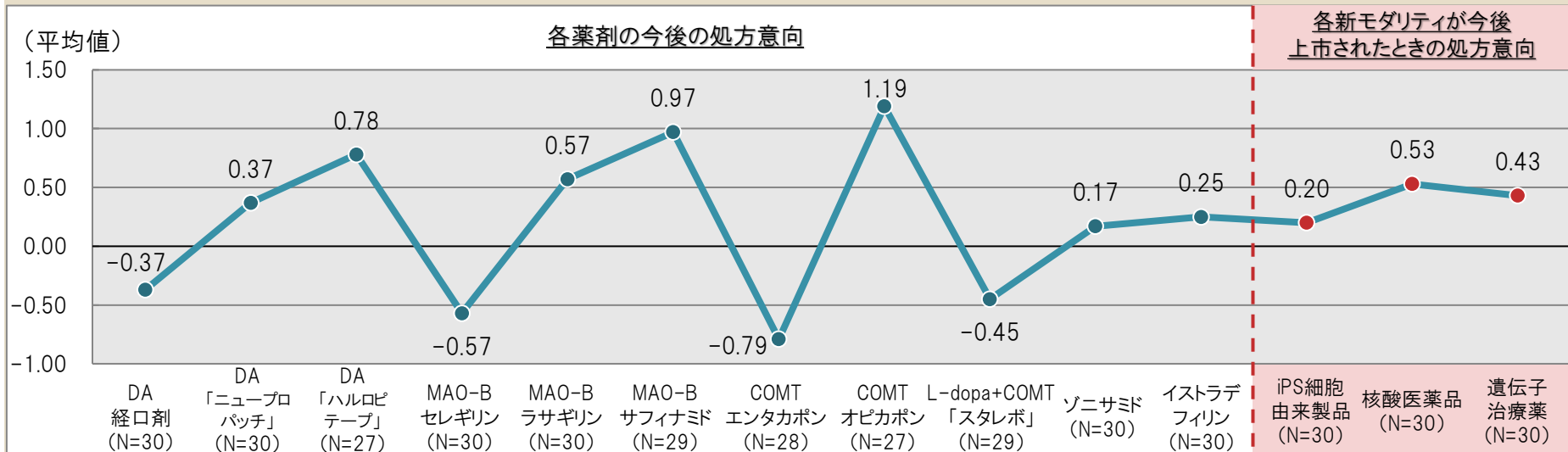
ー 判明している処方内容を見ると、「L-dopa製剤+ドパミンアゴニスト」が最も多く、27.7%の患者に処方されている。次いで、「L-dopa製剤(単剤)」が25.3%。以下、「L-dopa製剤+COMT阻害薬」が12.7%、「L-dopa製剤+ドパミンアゴニスト+MAO-B阻害薬」が12.0%、「L-dopa製剤+MAO-B阻害薬」が8.9%と続いている。

ー 薬剤別にみると、「L-dopa製剤」(「スタレボ」含む)は全体の98.6%とほとんどの患者に処方されている。また、「ドパミンアゴニスト」は47.3%で半数近くの患者に処方されている。以下、「MAO-B阻害薬」が27.3%、「COMT阻害薬」が15.2%、「L-dopa賦活剤」が8.2%、「アデノシンA2A受容体拮抗薬」が7.9%と続いている。

分析編 サンプル

6. 各薬剤および新モダリティの今後の処方意向

- 既存薬剤の今後の処方意向については、COMT阻害薬「オピカポン」、MAO-B阻害薬「サフィナミド」、経皮吸収型ドパミンアゴニスト「ハルロピテープ」が上位3剤。
- 将来の新モダリティについてみると、核酸医薬品の処方意向が比較的高かった。



選択肢	ウェイト値
大幅に処方を増やしたい	2.00
やや処方を増やしたい	1.00
現状と変わらない	0.00
やや処方を減らしたい	-1.00
大幅に処方を減らしたい	-2.00

— 各薬剤の今後の処方意向は上図の通り。COMT阻害薬「オピカポン」の処方意向が最も高く、MAO-B阻害薬「サフィナミド」、ドパミンアゴニスト「ハルロピテープ」と続いている。COMT阻害薬、MAO-B阻害薬、ドパミンアゴニストいずれの種類についても、新しい薬剤ほど処方意向が高くなっている。

— 新モダリティの上市後の処方意向については、「核酸医薬品」「遺伝子治療薬」「iPS細胞由来製品」の順で高かった。既存薬剤の処方意向上位3剤と比べると、処方に慎重な姿勢がみられる。

選択肢	ウェイト値
処方をしてみたい	2.00
どちらかといえば処方してみたい	1.00
どちらともいえない	0.00
どちらかといえば処方したくない	-1.00
処方したくない	-2.00